5月
May.2026
沖縄開教本部通信
vol. 123

ハイサイ沖縄

※「ハイサイ」・・・沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

沖縄と民芸（二）柳宗悦　沖縄に立つ

柳宗悦が初めて沖縄に足を踏み入れたのは、日本民藝館が創建されてから二年を経た一九三八年のことで、河井寛次郎と濱田庄司の初訪沖「二人はまだ柳宗悦と知り合ってはいなかった」から二十年も遅れてのことであった。出発前に濱田庄司に聞いたが「蒐集にはもう時期が遅れ余り期待はできまいとのはなしであった。私もそうに違いないと思っていた」と柳は回顧しているが、初めての沖縄はその想定をくつがえして、まったくすばらしいところであった。初回のたった十八日間の沖縄滞在は、柳を夢中にしてしまった。那覇に毎夕立つ古着市では「財布の空になるのも忘れて買い漁」り「借金して更に買い続けた」。今日日本民藝館に所蔵されている沖縄の絣などの大半をこのようにして蒐集したのであった。

柳は一旦帰京するが、約二か月後には「沖縄への驚きは止（や）まず、次には同志を集めて大挙して出かけた」。第二回は、柳兼子夫人が同行したほか、河井と濱田、芹澤銈介、棟方志功、鈴木繁男、柳悦孝ら、民藝同人総出の沖縄工藝調査で、同人たちが専門ごとに実作しつつ具体的な仕事を学ぶという、今日でもなかなかおこなわれない新しい企図であった。

柳宗悦がその滞在でもっとも深く「驚いた」のは、伝統工芸の品々そのものである以上に、沖縄の人々の暮らしぶりであり、その「凡（すべ）てが自然であり、純粋であり、誠実なものである」ことであった。柳の最初の沖縄についての報告「琉球の富」の巻頭には「墳墓」という章がおかれている。玉陵（たまうどぅん）の「死者がものいう如く活きている」空気のすごさに圧倒された柳は、沖縄の人びとの信仰が、その生活のあらゆる側面を支配していることに気づき、このことの「理解なくしては沖縄の美を解することができない」ことをはっきりと認識するのである。

柳宗悦の日本民藝協会主催の琉球観光団との第三回の訪沖直前に刊行された『工藝』誌第百三号の「首里と那覇」という写真集とその挿絵小註〔解説〕には、聖地で祈る女たちの信仰の篤さがつぶさに指摘されているが、柳はおそらくは壺屋などの拝所でも彼女たちのそんな姿を何度も見かけたのであろう。信仰が「今も活々と続く」そんな光景を眼前に見たことによって、その民藝のなかでの中心的意味が直覚されたのである。美しいものはその文化の全体から生み出され、その文化の中心には信仰があるという柳宗悦の民藝の基本図式は、沖縄でのこの実体験によって、確固としたものとして感取されたのであった。

柳宗悦を震撼させた玉陵は、当時と変わらず静かに首里の杜に佇む。

ハイサイ沖縄

【沖縄教化拠点　興念寺　報恩講】

沖縄本島北部の名護市にある興念寺では、二月七日に宗祖の報恩講がお勤めされた。興念寺は一九九八年に具志堅興吉氏によって開かれ、現在は子息の優己氏が引き継ぎ、法人化の手続きを進めている。今回の報恩講では、興吉氏は体調不良で出仕できなかったが、優己氏の子息で、今春大谷大学に編入予定の颯陽（あさひ）氏も出仕し、参詣者と共にお勤めした。

法話は沖縄別院の長谷輪番が、東本願寺出版から発刊された『たぬきの手習い』を取り上げた。この物語は長谷輪番の自坊に伝わる昔話であり、物語で願われていることは、仏さまからの「共に生きてください」という願いであるとお話しいただいた。現在世界では、武力や武力を背景に威嚇し屈服させることが続いているが、何を拠り所として生きており、どこで「共に」という事が成り立つのか、念仏であるとお話しいただいた。法話に引き続き、参詣者と共に御斎があり、それぞれの近況などを語り合うひと時となった。

長谷輪番による法話

具志堅優己氏による御文

沖縄は今！

【米軍ヘリが少年野球場に不時着】

三月六日の午後八時過ぎ、少年野球チームが練習している名護市許田の野球場敷地内に米軍のUH1ヘリコプターが不時着した。野球場は住宅街に隣接しており、着陸したヘリと最も近い民家との距離は約三十メートルである。市によると、けが人などはなく機体の損傷もない。機体は不時着から約二時間後の午後十時半ごろプロペラを回し始め、普天間飛行場に飛び立った。

目撃者によると、上空を旋回していたヘリが突然、降下してきたとの事で、周辺では警察官が一般車両の移動の指示を出す姿も確認された。沖縄防衛局の村井勝局長は九日、許田公民館で翁長武区長らと非公開で会談し、謝罪した。村井局長の説明によると、米軍側から「ナイターの明かりがついていたから一番安全だろうということで降りた」と説明があった。

渡具知名護市長は、「一歩間違えれば命にかかわる大惨事になりかねないものであり、市民に不安を与えたことは看過できるものではない」と指摘した。村井局長は「重く受け止めている」などと陳謝した。

低空飛行する米軍ヘリ（宜野湾）

コラム「伝承すべきこと」

饒波　聖　沖縄別院　職員

先日、四十代男性の四十九日法要へ伺い、そこには亡くなった人と同じ歳くらいの奥様がいて、沖縄式の供物がテーブルいっぱいに並べてありました。私が「凄いお供え物ですね」と言うと「親戚の叔母さん方に聞いて準備しました」と苦笑い。沖縄では昔からの風習で法事ごとの際お供えする物が多く、若い人たちは先輩たちに相談し準備します。

ところがいざお勤めを始めようとしたとき、一人の先輩女性が「エ～、ウチカビヤ」と言われました。（ウチカビ、あの世のお金のこと、模造品）その先輩女性は「あの世のお金もお供えしなさい」と奥様に言ったのです。彼女はウチカビを用意しておらずおどおどしていると「ナーシムサ、アレーアマシヒンスームンヤサ」（あんたの旦那はあの世で貧乏になるさ）と言われ、それを聞いて彼女は泣いてしまいました。

この場面に遭遇して、沖縄の風習に対して複雑な想いがこみあげてきました。亡き人を想いやる大切な風習であることは理解できます。しかしいつしか生きている我々が亡き人を「供養」する立場に立っている。私たちは「供養」する側でなく、願われているのだと気づいて欲しいと感じました。何を伝え、何を継承すべきなのか、法事の場で、皆さんと確かめていきたいものです。

ハイサイ沖縄　Vol. 123　2026年5月1日　隔月1日発行　発行所：真宗大谷派沖縄開教本部　発行者：長谷　暢
〒901-2223 沖縄県宜野湾市大山2-32-21　TEL.098-890-2490　HP http://shinran-oki.org/